リンカーンの新しい顔

ミーガン・ロフタス

2009年に米国で鋳造される何十億枚の1セント硬貨は、デザインが大きく変わる。エイブラハム・リンカーン生誕200年記念委員会(ALBC)と米国造幣局は2008年9月、リンカーン生誕200年を記念して1セント硬貨の裏側に使われることになった4つの新デザインを公表した。

新1セント硬貨は2009年の1年間で定期的に発行される。コインの表側のデザインは変わらない。リンカーン生誕100年の1909年からコインの表を飾ってきた、彫刻家ビクター・デビッド・ブレナーの手に成るリンカーンの横顔である。裏側は当時からすでに2度デザインが変わっている。しかし2009年には、リンカーンの人生を4つの時期に分けて表現するため、4回デザインが変わる予定である。まずはケンタッキーで過ごした幼少期。それからインディアナでの成長期。イリノイで弁護士業にいそしみ州議会議員を務めた時期。そしてワシントンDCで大統領の職にあった時期である。

米国連邦議会は、硬貨の変更を認可する権限を持つ唯一の機関だが、2005年、今回のデザイン変更のための法律を制定した。硬貨に使う図案は、造幣局所属の彫刻家・版画家から、および造幣局と契約している外部アーティストの集団である「アーティスティック・インフュージョン・プログラム」を通じて、提出されたものである。デザインの審査に当たったのは、ALBCおよび市民硬貨諮問委員会(Citizen Coin Advisory Committee)と米国美術委員会(U.S. Commission on Fine Arts)。そしてヘンリー・ポールソン財務長官（当時）がこれらの審査機関の提言をもとに最終決定した。

リチャード・マスターズの描いた丸太小屋は、ポールソン財務長官が選んだ今回の新しいデザインのひとつである。マスターズは少年のころコインのファンで、カブスカウト活動でコインを集め、メリットバッジ（技能章）の取得に励んだこともあった。しかし、自分自身がコインのデザイナーになるとか、ましてや、アーティスティック・インフュージョン・プログラムのマスター・デザイナーになるなど夢想もしていなかった。それが今やその任にある。

マスターズは子どものころ、硬貨のデザイン工程についても考えたことはなかった。コインの上に図柄が魔法のように現れるものだと思っていた。「コインにどんな絵を載せるか、どこかで誰かが決めるのだろう」としか考えていなかったという。

それから何十年かたった今、マスターズ本人がその「誰か」になっている。ALBCから提供された史実に基づくリンカーンの物語を出発点に、ケンタッキーでのリンカーンの生誕と幼少期のイメージをつくり上げていった。「あの丸太小屋は、たいていの米国人が知っているイメージだと思った」とウィスコンシン大学オシュコシュ校で美術の准教授でもあるマスターズは言う。

デザインで非常に難しかったのは大きさである。コインの小さな直径に合わせて、アーティストの視野も狭めなくてはならない。「ここで苦労したのは、この基本的要素に対する集中力を維持することでした」とマスターズは語る。

デザインの変更は今後も予定されている。連邦議会は、2010年から1セント硬貨の裏側のデザインを「団結したひとつの国家としてアメリカ合衆国を存続」させたリンカーンのイメージを特徴づけるものにすることを求めているが、具体的な図柄はまだ決まっていない。

ミーガン・ロフタスは米国国務省国際情報プログラム局の実習生である。

2009年、米国造幣局はリンカーン生誕200年を記念して、4種類の1セント硬貨を導入する。コインの表の図柄は変わらないが、裏側はリンカーンの人生におけるいくつかの場面を取り上げたデザインになる。